

東京鷹桜同窓会報



あれは何時 桑の実摘みし 蚕飼村

(丸川 満)

巻頭の言葉

安部 欣一

東京鷹桜同窓会副会長
学事出版(株)社長



もう50年も昔の話である。私は旧長井町の西、西根地区から、毎日片道6kmの道のりを通学していた。町はずれに水上(みずかみ)の部落があった。そこから私の住んでいた川原沢部落まで、住家もまばらな田んぼの中の道が続いている。夕方になると一面が暗くなり、淋しい風景が道々を包んでいた。私の詩に、「帰るさの／町の灯ひとりしょんぼり／村に通る一筋の道／白く残れり」というのがあるが(あとで、作曲：中田博之、箏：沢井忠夫、歌：梅津ふじ、の諸氏によって東芝からレコードになった)、いつも故郷を想うとき、この風景が臉をよぎる。だれでも、こんな“とっておきの風景”があるのではないだろうか、と私は思う。

こんな“とっておきの風景”の集積が、自分というものの画像なのかも知れない。いままで、鷹桜同窓会も、戦後だけで40回を迎えようとしている。その一時ひとときが、友人たちの面影とかさなり合って、私の人生そのものを織りなしている。長井の里での思い出と、それに続く友との出会いとして、同窓会は生き続けて欲しいと思う。(昭15卒)



「破壊と構築」わが絵画人生

わが道を行く

菅野力蔵

洋画家：白樹社代表

太平洋美術会会員



過日、ある美術誌の依頼で、1987年7月、パリで急逝した画家「木村忠太の絵画」についての座談会に出席した。同席したのは画商のK氏、二科会のO氏と私の三人で、没後急に話題となってきた木村の作品の魅力についてそれぞれの立場から分析し、その全貌に迫まろうというようなことだった。私は1975年に銀座の日動画廊で「木村忠太展」を見て俄然その仕事に惚れてしまい、以後、彼の作品展は欠かさず見てきたので、彼が「天の啓示により」表現が一変したと語る1965年代からの作品はほとんど記憶していたが、座談会の席上、主催者が用意していた彼の作品の写真中に、初期の『トロッコを押す男』『炭坑夫』（1942年、独立賞受賞）を見た時、暗い戦争時代に青春の真只中だった頃の思い出が、走馬灯のように私の頭の中を廻り始めた。

木村忠太が『炭坑夫』を描いた1942年、私は長井中学校の5年生で、進学のことと懊悩の日々を送っていた。小供の頃から絵ばかり描いて親に叱られていたが、画家になることを夢にみて中学校に進学した私は、当然のように美術部に入り、担当の安倍栄作先生の指導で基礎デッサンからの特訓を受けて画家への夢を大きくふくらませていた。しかし我が家は伯父（父の兄）が画家になって家督を放棄し、そのうえ生活が出来ないで仕送りを受けている状態で、長男である私がまた画家になることなど、とても許されるはずがないことは明白だった。絵を描いて生活が出来る時代でもないし、だからといって好きな絵を捨てることも出来ないで、進学希望校を東京美術学校として学校に申し出て、担任の斎藤先生から「親ごさんは承知しているのか」と念を押されて返答に窮したことを今でも覚えている。安倍先生は、私の親を説得して美術学校受験を実現させると頑張ってたが、逆に親戚や親たちから説得されて、私に「美校受験を断念するように」と奥さんの二人

で言い出される始末、私の希望は夢で終りとなってしまった。家に残った私は、太平洋戦争の進展と敗戦のどさくさの中でも絵ばかり描いている生活にあまり変化は無く、そのうえ伯父が焼け出されて（空爆で）引き上げて来てからは、油絵の手ほどきを受けて、いよいよ本格的に絵を描き出し、家人の反感を買うこととなった。1946年に絵を描く仲間が集まり、グループ展を開催、その後は県展や個展などで作品を発表しながら、少しずつ絵画の本質的なものに目を開いて行った。1960年に上京。もちろん絵で生活を維持することなど出来ないで、いろいろなことをやって生きてきましたが、多くの絵描きと交流しながら自分の絵について考え、そして絵と格闘し、いくらかは自分の絵がわかりかけてきたように思う今までです。

私が絵を描く上で信条としている言葉は、「破壊と構築」です。目で見えた物や現象をそのまま描いても絵とは言いがたい。作者の心奥で咀嚼して、キャンパスの上に構築するのが絵であり、そこに作家の信条や人間性が具現されるものだと考えている。私にとって、絵は哲学であり宗教でもある。「でも、もう少しきれいな絵を描けないのかネ…」と友人は私に言う。いくら高邁な思想や信条があっても、世の中の人に認められない作品では一人よがりでしかないではないか、ということなのだ。全くその通りかも知れないが、私はいつまでたっても荒々しく汚い絵を描き続けることだろうと思う。描いても描いても満足できないで、「こんな絵は俺の絵じゃない」と喚きながら…。息子が「彫刻家になる」と言った時、私は昔私が絵描きになると言った時の親の顔をチラッと思い出したが黙ってうなづいた。息子に貧乏生活へのキップを渡した私は一生その重荷を背負うことになるだろうが、大きな作品を完成した息子の笑顔を相手に盃をかわす時は「これで良かったのだナ」と独語を言ったりする。私の絵も人生も「破壊と構築」の連続ではあるのだが…。(昭18卒)

先生お元気ですか

この1年半

長井の頃、山形の今

佐藤祐二先生

(英語)



長井線の線路をへだてて、長井高校のすぐ西に住んでいるので、学校の放送がよく聞えて来ます。野球部員の声も、応援歌の練習も、風に乗って伝って来るのです。

南長井駅では、乗り降りしたり、また、ホームや待合室で列車を待っている生徒諸君を、朝夕よく見かけます。

昭和55年3月に退職してから、荒砥・長井・米沢と方々の学校に出ました。外国留学や病気の方の代りです。この度も、今年の3月まで1年半近く長井高校に出ていました。

3年生の教材には、和辻哲郎の『風土』の英訳があり、モンスーン地帯の中の日本とその湿気、これと対照的なヨーロッパの風土、これから来る個人と社会についての考え方や行動様式の比較、大変興味深く読みました。しかし、これは、私ひとりがおもしろがっていたのかも知れません。

去年の7月、校舎の東に続けて増築、学校図書館と美術その他の教室が新しく出来上りました。8月はじめ、3日ばかりで約2万冊の図書・雑誌を運びました。今度は移動式書架の書庫なので、図書の収容能力は一段と大きくなりました。

その後、山形相互銀行から岩波文庫約1千冊の寄贈を受けました。私は図書館の係りなので、司書の波多野さんたちと、毎日、この分類・登録の仕事を4月までやっていました。

その中には、かつての国禁の書もあり、時代の移り変わりをしみじみと感じました。

当時、図書委員であった私は、石川達三の『日蔭の村』を備えようとして、係りの先生から「これは中学生の読む本ではない」と言われ、ところどころに伏せ字のあるその本を書店に返させられたことがあったからです。

校庭のプラタナスは幹太く、枝しげり、堂々と天に向かって聳えています。校舎から眺める広いグラウンドの向うには、遠く、飯豊・吾妻の山々は、白く輝く、美しい峯々を連ねています。

松坂俊夫先生

(国語)



はじめに、ほんの少し自己紹介を…。ぼくが長井北高に勤めたのは、大学を卒業した昭和31年から6年間でした。当時の北高は、女生徒のみの全日制と、共学の定時制(昼間部と夜間部)がありました

が、ぼくは全日制、定時制の両方で国語の教科を担当しました。

その頃教室で何を教えたかは、ほとんど覚えていませんが、鮮烈な記憶といえば、演劇部と新聞委員会のことです。着任して間もなく、演劇部をつくりたいという全定両方の生徒と一緒に、脚本を選び、稽古を重ね、文化祭や卒業式前の公演に備えました。

公演が近づくと放課後から夜中まで、男の生徒はもちろんのこと、女生徒も11時12時までの練習は珍らしくありませんでした。今考えると不思議ですが、誰からも何も言われたことはなかったと思います。

演劇部のみんなは、いつも公演に向かって激しく燃えていました。ですから、公演も終わり卒業する部員の送別コンパでは、みんな声をあげて泣いたことを思い出します。

そして新聞委員会。生徒会役員の有志を委員につくりはじめました。本会報編集委員の武田律子さんもその一人でしたが、発行の日が近づくと土曜の午後と日曜が作成に当てられ、日曜返上が何週も続いたものです。しかし、刷り上がったばかりのインクの香りと喜びの涙にむせんだ記憶は、今も消えません。その頃、生徒たちはもとよりのこと、ぼくにも青春の季節だったのです。

現在の山形女子短大に勤めるようになってから早くも12年になります。短大では国文科で近代文学一樋口一葉、川端康成などについて講義し、井上ひさし、藤沢周平、丸谷才一など、山形県出身の作家について調べています。

自分では若いつもりでも、長井時代から数えて30年、時の流れの早さを改めて感じています。



医業と登山の狭間を歩む私の人生

人生の並木道

黒石 恒

開業医



絵描き志望を父に反対され、止むなく医師となったものの、最も不本意な開業医の途を選択することを余儀なくされ、多忙なだけで、心安らく暇もない索漠たる生活に倦み疲れ、憂さ晴しのつもりで始めた登山にのめり込んで行った。そして、本日休診が4~5ヶ月も続く海外遠征に参加するというエスカレートぶりに、ある友人から「貴女の人生は登山が最優先、仕事は二の次、女房稼業に至っては片手間仕事ね。そんな風に自分のエゴをおし通して破綻を来さないのは、いったい誰のお蔭かしら。自分の才覚で万事うまく納っているなんて自負しているなら、救いようがない」と苦言を呈された。それに対して、日頃、医師としても家庭を持つ身としても失格者だと、内心忸怩たるもののある私は、痛いところを衝かれて、返す言葉もなかった。

しかし、医師というのは因果な職業で、どこにでも従って廻り、登山自体は遊びだが、私の場合は、職業から完全に解放された遊びとはなり得ない。海外遠征ともなれば、最低限、隊員達と、登山をするために雇う現地人達の健康管理とか、病気や怪我の治療をしなければならぬ。ネパールでは、登山隊に住民の診療を義務づけていた時代があり、ベースキャンプまでのキャラバンルートに当る地域の病人の治療をさせられた。医療施設が皆無という地帯では、登山隊が通るといふ情報が流れると、何日もかけて治療を受けに来る患者もおり、また、治療を受けるためにずっと隊の後を追って来る患者もいたから、キャンプ地に着けば、どんなに疲れていようとも、彼らの診療を拒むことは不可能だった。土着の言葉から英語に通訳される患者の訴えが、正確に私に伝わっているかという疑問もあり、投薬も1週間分が限度とあっては、全治の難しい患者もいるだろう、果たしてこれを、診療と呼べるものかと悩みつつも、義務としての診療を行っていた。

ベースキャンプ入りをすれば、長期間定着するので、入院加療の必要な重症患者さえ、往診しながら治してやれたり、良心の痛まない治療が出来たから、半人前の医師の私でも、こんな風な役立ち方も出来るのかと驚き、誤った職業を選んだと後悔の臍をかむことも、医師を廃業しようなどと思ひ悩むこともないのだと、悟らされた。

また、私が南米のアンデスに遠征した1960年代には、高山病に関する資料も文献もほとんどなく、初めて経験する高山病の治療は、対症療法だけだった。近年、医学の進歩と、登山隊に同行する医師達の弛まぬ研究によって、高山病の実態が解明されつつあり、毎年1回開催される高所医学のシンポジウムにおいて発表される報告には、眼を見張るものがある。私も、研究会の一員として、隊員達からモルモット扱いをしないでと嫌われながらも、データの採取を行って来た。そうしたフィールド・ワークは私の性に合っているらしく、自分の診療所で患者を診ているよりは、よほど楽しい作業である。

ほんの遊びのつもりで始めた登山は、私の人生を思わぬ方向に導き、測り知れない恩恵をももたらしてくれた。山で、風景や植物のスケッチを始めたことがきっかけで、絵を描く仲間が出来、山岳会の会員の画家達の、指導を仰ぐ機会も作ることが出来た。最近では、絵の題材も山に限らず、デッサンクラブで裸婦にとり組んだりもしている。このように、絵の描ける生活を実現させることが出来たのも、山から得た恩恵の一つである。

還歴をとうに過ぎた現在でも、山との縁は切れず、今年の春にはインドネシア領のロンボク島にある、リンジャニ山で、マタラム大学の山岳部員達との合同登山を果たし、両国の親善にも務めてきた。来年はブータンの山が待っているし、6年前に知り合った彼の地の人々と、旧交を温めることを楽しみにしている。このようにして山から得た活力で、医師としての仕事も出来る限り続けるつもりで、引退などは考えていない。(昭17卒)

あの日
あの頃

団地が出来た頃の思い出

菅 七 郎

東京鷹桜同窓会常任幹事
(株)ライプシステム総務部長



「今日は、炭をお届けに来ました」と、その冬に備えての暖房用木炭を、岩手県農協からトラック一車分購入し、チラシを作って2000戸のポストに自分で配達して歩いてとった注文の炭。「あこの、この炭短かく切ってください」といわれてビックリ。炭は、使う人が使いやすくしてという田舎での生活に馴れている私も、困ってしまい、仕方なく鋸で切り刻むハメになったものです。

当時私は景気のドン底時代、「大学は出たけれど」という言葉通りに職がありません。何とか先輩の手づるで山形県庁の一分室にもぐり込むことが出来ました。臨時職員ということで日給260円です。あの頃、市町村では、失業対策事業として日雇人夫を使用した日当は240円でニコヨンと言った時代です。私も正職員になりたくて上司を動かして本庁に交渉してもらったのですが、県では公務員の新規採用試験当分なし、見通し立たずとのことで、「力が及ばず申し訳ありません」との上司の詫びの言葉を背に再上京。友人の紹介で団地内のマーケットのマネジャーとして再スタートを切った。この団地は、住宅公団が事業を始めて大規模に入居させた3番目ぐらいの団地で、柏市の郊外に2000世帯の当時としては大きなものだった。公団では、テスト的に中心に賃貸店舗を設け、日常の買物が出来るように工夫したのですが、その四分の一のスペースを借りている店のマネジャーということになった。

町の電気屋の窓口として代理店活動をやった時、テレビのアンテナだけの注文の多いことに驚いた。団地の屋上に次々とアンテナは立つが、本体の注文はほとんどなかった。外に設置された街頭テレビの前には、黒山の人だかりが出来た時代です。団地の中では、電気料が払えなくて東電から送電ストップされた家もありました。アンテナがみじめに見えました。天気の良い日に、ベランダには洗濯物、フツンの満艦飾、今でも変ってい

ないのですが、当時フツンは、普段使っているのはベランダに出しません。お客様用のフツンを出したほど見栄を張ったものです。

卵は今でも値段が30年前とあまり変わっていませんが、店の目玉商品の一つとして欠かせない材料です。卵を目方売りした時、5~6個を紙袋に入れて計量台に乗せて値段を言うと、「風袋引いたの!」ときれいな奥さんに言われてビックリ。紙袋の目方は一枚位では針が動きません。当時の団地族の実態でした。

団地の入居者は、若い共働らきの人が多いので、自分の家に帰るまで、勤務先(ほとんど都内)の近くで買物を済ませることが多いと見えて、店の売上げも、採算をとれるまではいきません。マネジャーを引き受けてからは、ほとんど毎日、3時過ぎると、銀行から「今日は〇〇〇円の不足です。よろしくお願いします」と電話が来ます。即刻レジから今までの売上げ金の回収をして、銀行へ持って行きます。銀行は3時以後は裏門から入って当座の人に渡します。今では考えられない銀行の対応です。天下の三菱銀行〇〇支店です。私が売上げ予測をして、切った小切手、手形の当座不足を電話で知らせ、入金を待ってくれるのです。私は無免許運転で、側車つきのオートバイ、ホンダドリーム号250ccに乗って毎日入金に行ったものです。今ではそんな無謀なことは出来ませんが、一度も警察にお世話になりませんでした。車の数も少なかった時分です。資金不足は最後に、大晦日にしわ寄せが来ます。銀行の支店長の側で、「もう少し待ってください」と言ってもレジから金を持って来させ、夜7時までねばり、支店長が「あと不足分は、正月3日から銀行が始まりますので、2日の日から店を開けて、3日に入金して下さい。今日の不足は年越ししましょう」と言ってくれた時の支店長の顔が、仏様に見えたものです。今なら「不渡り」2回で銀行取引停止、と冷たく片付けられることでしょうが、人の心の暖かい時代でもありました。(昭27卒)

われらの長高図書館

—現在・過去・未来—

〔話し手〕 今田久夫先生：第17代学校長

波多野純子さん：学校司書

〔聞き手〕 丸川 満：東京鷹桜同窓会編集委員
(株)朝倉書店企画部課長

丸川 長井高校図書館は昨年8月に新装オープンし、その利用や図書館活動の充実がますます期待されると思いますが、きょうは同窓生のために何か役に立つ情報でもあれば御紹介いただきたいと思ひまして、今田校長先生と永く図書館にお勤めの波多野さんに、ざっくばらんにお尋ねすることにいたしました。最初に、波多野さんから新築移転のことも含めて長高図書館の歴史と、現在の状況の概略をお話いただけますか。

波多野 母校の旧・旧図書館(長井南校時代)は昔の寄宿舎を改造し、2階半分に位置していましたが、老朽化し危険校舎になっていました。生徒の急増に伴い、校舎の改築と図書館の建設が計画され、37年度に、正門に近い場所に、軽量鉄骨モルタル塗2階建校舎が完成しました(普通教室四室と共に)。2階の3分の2が図書館でした。現在の生徒棟が完成し、四教室がそちらに移転してからは、2階は名実共に図書館となり、昭和38年度から63年7月までの25年間を多くの生徒達の読書活動や学習の場として利用されてきたのです。しかし25年の歳月には勝つことはできず、老朽化が進み、その上蔵書数も増加し、広くて明るい図書館建設が望まれたのであります。ついに体育館に近い生徒棟東側に特別教室と図書館が増築されることになりました。与えられたスペースをいかに機能的に効率的に利用できる図書館にできるかが、内部設計の大きな課題でした。先進校の図書館訪問や、平面図を参照したり、実際に図面をひいたりもしてみました。

いよいよ工事着工となり、基礎工事の騒音も気にならないくらい大きな期待でいっぱいでした。幸い暖冬で積雪も少なく順調に工事もすすみ、7月下旬に竣工検査が行なわれ、新図書館が誕生したのです。我が母校図書館は、このような変遷を

経て今日に至ったのです。

旧図書館は、数多くの卒業生が、読書に勉学に、青春時代を共に過した一つの空間でしたが、壁の落書もろとも、あっという間に解体され姿を消してしまいました。暑い暑い夏の日のことでした。

蔵書数は平成元年3月現在、約23,600冊です。

丸川 引越しは本当にお疲れさまでした。言葉では言えないほどの御苦勞があったことと思いますが、その様子を少しお話ください。

波多野 引越しについては、建設計画の段階から本屋さんに教科書用ダンボールの空箱を注文して400箱ほど確保しておきました。移転に関しての委員会がつくられ移動の方法について会議をし計画をねり準備をすすめました。あらかじめ各教科担当者で除籍する本を選別し、その他は分類毎にダンボール箱につめ込み、箱ごとに指示表を貼付しました。23,000冊の書物は400箱ではおさめられなく、残りは運搬可能な重量に分けて、ビニールテープでくくりつけておきました。

8月上旬に1年生2クラスずつ3日間で蔵書の大移動が行なわれたのです。教頭先生を先頭に全職員と生徒諸君の一致団結の結果、事故もなく、実に整然と移動が終了したのです。書架やカードボックス等は、プロの運送屋さんが、あっという間に移動して下さいました。人海戦術の効を、まざまざとみせつけられ、感激の一瞬でした。

新図書館について { 司書室(移動書庫付) 41.90 m²
総面積 290.73 m² { 閲覧室 209.51 m²

- 生徒棟2階に位置し、南北に窓を大きくとったため通風・採光ともに抜群です。
- 生徒棟端に位置しているため生徒が利用しやすく、休み時間にも活用している。
- 書架・閲覧机・椅子ともに木製のため、どっしり



旧図書館の閲覧室

と落ちついた雰囲気であること。

○冬期間の暖房はスチームで静かで、その上クリーンな館内になっています。

丸川 ところで、今田校長先生は県立図書館長も歴任して来られ、図書館とその活動、読書や文化に対しても造詣が深くあられますが、長高図書館も含めて、学校図書館のあり方やその利用法について理想論を語っていただけませんか。

今田 61年度に県立図書館長を経験して、改めて公共図書館や学校図書館の役割とその重要性を認識した次第です。



臨時教育審議会の第一次答申に、学校教育大系から生涯学習大系への移行が打ちだされていますが、各種教育機関や施設の中でも公共図書館がその中核になるものと考えられます。

次に、学校図書館のあり方についてですが、従来の学校図書館は「学習センター」へ脱皮すべきだと考えています。それは校舎における位置づけもありますが、主として機能の面で文字通り学習のセンターであるべきだと考えます。そこに収蔵されるメディアは図書を中心とした活字メディアばかりでなく、音声メディアや映像メディアと多様なメディアが含まれるし、面積も相当広くする必要があります。また、音声メディアや映像メディアを利用するブースやサービス・管理に当る職員も増員されるべきです。

さらに、利用法についても従来図書館を利用する時間帯は昼休み、放課後が大半で、時折ロングホームルームでの集団読書ぐらいであったが、学習センターにおいては教科の授業でも利用するのが当たり前になるでしょうし、ブースでビデオやカ



引越し作業中の豊島教頭、今井英男先生と生徒達

セットテープによる学習など多様な学習活動が開されるでしょう。なお、生徒の利用を助けるために、コンピュータを導入して利用したいメディアを容易に検索できるようにすべきだと思いますね。このような学習センター方式を整備しつつある高校が山形県内に2校あります。

もう13年も前になりますが、アメリカの教育事情視察に出かけた時、ホノルル市のプナホー高校の学習センターを見学してきました。大体育館と見違ふような独立の建物で、広いブラウジングコーナー、開架式書架(床にはカーペットがしかれ腰を下して読書している姿が見られた)、南側には大小の教室が5~6室付設され、一部で授業が行われていました。また、小教室では自習する者、数人で8ミリフィルムを視聴している生徒も見受けました。地階ではビデオの貸出しをやっており、印刷室もありました。職員は6~7名もおりました。当時はこれが学習センターかと、その素晴らしさに眼を見張ったものでした。

丸川 長高図書館においても生徒図書委員会の活動が年々充実して来て、それが伝統として受け継がれるまでに成長したと思いますが、これまで実際に生徒を御指導されて来た立場から、なにか苦労話とか特に思い出に残るようなことがありましたら、ぜひ波多野さんに御披露していただきたいのですが……。

波多野 昭和42年頃までの図書委員は各クラス1名男女を問わず選任されていましたが、それ以後は18名の女子だけの活動となりました。図書委員は各クラスメートの図書館活動の中核となって、喜こんでサービスを行ない、委員相互の連携を



密にして活動することを目標としています。

図書委員長は3年から1名(互選)、副委員長は2年から1名(同上)、連絡委員は1年から1名(同上)、それぞれ選ばれます。

次に班編成と活動内容をお話ししましょう。

読書・編集班は、読書会の主催、「リーディングタイムズ」の編集・発行(6pで年2回発行)、修学旅行の資料展を行ないます。

広報・美化班は、「プラタナス」を月1回発行し(新刊案内や、さまざまなお知らせ版で手書きで作成)、館内の美化につとめます。

調査・統計班は、図書館利用の調査・統計、全校生から購入希望図書の調査、読書傾向調査をします。

一般的活動としては、月1回定例図書委員会を開催、昼休時間・放課後のカウンター当番(図書館日誌・日計表の記録・コピーサービス業務)、蔵書点検(年1回)、読書会に参加、延滞図書の督促、校内・外の図書委員研修会に参加することなどがあります。

以上の活動を行なっていますが、進学校であり、3年生は平日講習や模擬テスト等があるため実質的な活動は1・2年生で行なっています。職員も、生徒も多忙すぎて、時間を作るのに四苦八苦の現状です。

丸川 「リーディングタイムズ」は、その後ますます面白い誌面構成になったと聞いていますがいかがですか。

波多野 昭和38年に丸川満初代図書委員長によって命名発行された図書館報「リーディングタイムズ」も、平成元年度で67号を重ねることができました。内容がパターン化しないように注意し「読んでもらえる館報」作りに編集委員一同はりきっています。

丸川 きょうは、私たち同窓生にとってなにがいいお話があればと期待しているんですが……。せっかくの機会です。私からも一つ提案のようなことを言わせていただきたいと思ひます。私たちは、卒業してしまおうと母校に立ち寄ることはほとんどなくなってしまうのが当たり前で、また行ってみたくとも億劫になるのが普通ですよ。そこで、図書館に同窓生のためのフロアーというか、気軽に利用できるシステムをつくっていただいたらどうかと思うんです。長高図書館が、長井



地域の住民にどれほど開放されているかは知りませんが、これからは学校図書館が生徒だけでなくもっと多くの人々に利用され、地域の活性化や同窓生のためにも役立てられることが大切だと思います。県外に住んでいる同窓生がたまに帰省して、ぶらりと母校に立ち寄って気軽に懐かしい思い出話でもできるような“わずかな空間”が、図書館の片隅にでもできたらいいなと思うのですが校長先生、このアイデアはいかがでしょうか。管理のこととか、実際的な問題がいろいろあるでしょうし、波多野さんの御意見もお願いしたいと思ひます。

今田 最初に、学校図書館を地域社会に開放することについてですが、基本的に学校(施設・設備や教員も)は地域社会に開放され、利用されるべきだと考えています。現に本校の体育館は10年前から、地域のバレーボールクラブに週2回夜間開放していますし、本校教職員による成人開放講座(年10回、主として土曜日の午後約3時間、講話、実技講習、野外見学等)を実施しました。

さて、学校図書館の開放については体育館の開放のように簡単にはいかないと考えます。それはオープン時間が夕方以降になる訳ですから、そのための職員を配置しなければなりませんし、利用者は館内で閲覧するよりも貸出しを希望するでしょうから、それが生徒や先生方の利用に支障をきたすことになりかねません。

したがって、今後の方向としては、まず公共図書館(区市町村立図書館)を充実すること、学校図書館については職員の増員、図書資料の充実を図るなど条件整備を進めながら開放にもっていくことだと思いますが…。

それから図書館に同窓生のためのフロアーを設けてはとのアイデアは結構だと思います。私は以前から同窓生の著作物(個人・グループとも)、講話等のカセットテープやビデオ、卒業年次毎のアルバムをはじめ、同窓生の絵・書・遺品などを収納し、展示する同窓生記念室を構想しておりました。これを図書館に隣接させて作りたいと考えておりますが、如何でしょうか。

波多野 はじめに、学校図書館の地域開放につきましては、学校教育に支障がなければまことに結構なことだと思います。しかし、現在の建物の構造と位置・面積・蔵書冊数・閲覧席数等のことだけでなく、人的問題(専門的な人材を複数での確保ができるか?)、などの多くの問題が考えら

れます。学校図書館の蔵書は「教育過程の展開」のために寄与する「基本図書」を中心に構成されていますので、地域社会の方々の読書要求を満たすのに十分な蔵書構成でないことは明白なのです。地域開放の基礎条件が満たされていない現在の学校図書館の開放は時期尚早かと思われます。近い将来、条件整備をし、いつの日か実現できますことを祈っております。

丸川 同窓生のために、たいへん意義のある前向きな御意見をいただきましてほんとうにありがとうございました。最後に、同窓生の皆さんに何かメッセージがございましたらお願いしたいと思います。

今田 前年度から新入会員歓迎会を開催下さるなど、ご高配を賜り厚く御礼申し上げます。新入会員や若い会員には、同窓の先輩との絆が大きな支えであると考えます。とくに逆境にある時は命綱でもあると思います。卒業式前日に開催しております同窓会入会式では、先輩を頼れと申しております。どうか後輩をよろしく願い申し上げます。



新図書館の閲覧室



貸出しカウンターと閲覧室

す。

最後に、高橋会長さんをはじめ、会員の皆様の方々のお健勝とご多幸を、併せて東京鷹桜同窓会のご隆昌を祈念致します。

波多野 卒業生の方々、ふるさとお帰りになられました際には、母校にも、そして図書館にもぜひお立ち寄り下さいませ。卒業生の方の執筆された貴重な図書も度々御恵贈いただき、御厚志のほどに厚くお礼申し上げます。郷土資料と共に別置き、生徒・職員共ども、利用させていただいております。紙面を拝借しましてお礼申し上げます。

最後になりましたけど、同窓生の皆様のおますのご多幸とご健勝をみちのくよりお祈りいたします。

丸川 校長先生、波多野さん、たいへんお忙しい中、同窓生のために貴重なお話をいただきまして誠にありがとうございました。

 母校と同窓生のパイプをさらに一層太くするためにはどうしたら良いのだろうか。その一つの試みとして図書館を取りあげ、誌上インタビューをして特集を組んでみました。御意見などお寄せください。



司書室と移動書庫

「やまがた讃歌」ふるさとを結ぶコーラス

武田 律子

東京鷹桜同窓会編集委員



昨年の夏、8月20日、世界に誇る音楽の殿堂サントリーホールで、文化庁優秀舞台芸術奨励公演として、山形の四季を詩いあげた交響讃歌「やまがた」が村川千秋指揮で公演されました。これは、

山形県民会館25周年記念事業文化振興記念音楽として、県下より公募して選ばれた16編の詩で綴った五章と序曲、「春」「夏」「秋」「冬」「希望」に構成されています。その詩に鶴岡市出身の佐藤敏直先生が作曲されたものです。

飯豊にかかる雪どけ水の一滴が、野川や松川、そして最上川となり、日本海の荒波に消えていくまでを、情緒豊かにうたいあげ、先人が築いた文化遺産をたたえながら、“アルカディアやまがた”へと続きます。

5月頃、山形交響楽団より、在京の県人会、同窓会等にぜひ協力してくれるように依頼があり、我が鷹桜同窓会としても約80枚ほどチケット販売の協力をすることが出来ました。その連絡の際、私も長年コーラス狂であると思った山響の方より参加することを誘われました。在京の合唱団「白樺」や山形合唱団に加え、新しく「山形県人東京合唱団」が結成されたので、そこに参加させていただきました。そこには山音会（山形大学教

育学部特設音楽科の卒業生）を中心とした県下の高校合唱部OBが約50名ほど集まりました。即席の合唱団なのに、さすが音楽好きと山形県人であるという共通点でしっかり絆も結ばれ、その後も楽しい交際が続いています。

残雪の飯豊、朝日の山々

春まだ浅い白き山、それは月山

信仰はぐくむ 神々の山

春から冬へと山形の自然や歴史、民俗など、どの一節をとっても懐かしい場面が各々の胸に浮かび、歌っている人も聴衆も一体となって感動しました。尺八、太鼓、出羽三山のホラ貝を吹く山伏まで現われ、350名のコーラスと80名のオーケストラがサントリーホールにとどろきました。まさしく地方と東京が結集した一大イベントであり、「山形県人ここにあり！」と表明した形となりました。「地方の時代」と言われ続けていますが、東京の文化が地方に流れていくだけではなく、これは逆流してきたものです。

この曲はもちろん、県に関係ない聴衆の方にも大きな感動を与えた様で、私達もどんなに誇りに思ったことでしょう。このような企画に参加させていただき本当に幸せでした。この思い出を大切な宝物として心の引き出しにしまっておきましょう。
(昭34卒)



♀ あ の 人 ・ こ の 人 ♀



紬の里，長井

大谷 礼子

朝に夕に東山，西山を眺めて，友と良く遊んだ松川のきびしい流れの中に魚を捕ったり，野川の澄み切った清水の冷たさの中で泳いだその頃が，とてもなつかしく思い起こされます。

移りゆく四季折りおりの自然の中にどっぷりと浸り，のんびり，ゆったりと過ごした頃が最高に幸せだった気がいたします。

年齢を重ねるたびに，ふる里の想いが強く募ってきます。

そのふる里の産物である長井紬は，昔から馴れ親しんだ着物として，今も愛着があります。玉糸使いの緯総よこぞうがすりが特徴で，置賜つむぎ，米琉つむぎ，長井紬と名前が付き，デパートや呉服店では高価な品として売られております。すべて手作業のせいでしょうか，暖かいぬくもりと，思いを込めて織ってくれた息使いまで伝わってくる気がいたします。

あのしゃきとした紬の魅力に引かれ，この東京で長井紬を着ることが私の夢でした。自分で着物を着ることが出来なかつたので，着付を習得しました。今はお教えする立場に立っております。日本の民族衣裳である着物を着られる人達が年々減っていることは，たいへん残念です。着たいという願望は以外と多いようですが，親から娘へと伝えられる着物も，娘時代にはなくなってしまうのでしょうか？

着物離れの昨今，紬を着て女性の魅力が発揮出来たならと，理想を追っております。

(昭31卒)



ソフト教材開発

に専念

今野 秀司
内田洋行企画部課長

私は，昭和33年，長井南高校と称していたときに卒業し，以来30年が経過してしまいました。信じられないような感じを抱くとともに，今更ながら自分の年齢を思い知らされます。

昭和37年に，山形から神奈川に住みつき，今ではすっかり現在地に定着してしまいました。神奈川の中央部厚木市から東京まで，混雑で名高い小田急線で通勤する毎日です。高校時代も片道1時間半はかかる通学でしたが，現在も全く同じ時間をかけての通勤。通学，通勤に多大なエネルギーを消費しているせいか，いわゆる中年太りにはならず，体重は30年来ほとんど変動はありません。しかし，頭髪は日に日にウスくなり，白髪も増してくるのは，防ぎようもありません。

高校時代のことを，あれこれ思い出そうとしても，記憶はかなり断片的になってしまいました。しかし，白鷹山のふもとから長井線の荒砥駅までの約4kmの道のりを，夏は自転車で，冬は頑健な足で通い，そして長井駅へ。そこから長井市の中心街をデカンショデカンショといわれる高下駄で，カランカラン響かせて誇らしげに歩いた日々が，鮮明に思い出されます。また，デカンショの足の当たる部分が，くっきりと足指の型がつく程力を入れて歩いた日々…。当時の方は，きつとなつかしく思い出されることでしょう。

職業も，小学校教師から現在の企業へ転身しました。今は，小学校から大学までに教材として使用されるソフト教材の開発に専念しております。地図・掛図の類からビデオ・パソコンソフトまでの幅広い分野を手がけており，その間いろいろな業界，教育関係者とのつきあいも広がり，そこそこ充実した日々を過ごしております。同窓生の皆様に，こうしたことに関連する情報がありましたら是非ご一報いただければ幸甚です。

最後に，東京鷹桜同窓会の益々のご発展と同窓生の皆様のご活躍を祈念致します。(昭33卒)

鷹 桜 通 信

高橋里ん(大14卒) 満80歳を迎えました。出席できず残念です。御盛況をお祈り致します。

森谷晃三(昭2卒) 10月下旬に孫娘の結婚式があり、それに参列のため総会では欠席となります。御盛會を祈ります。

林崎春子(昭4卒) 同窓会報を本当になつかしく楽しく拝見致しました。故郷の姿が目前に浮かんで参りました。幹事の方々、御苦勞様です。

佐々木しづゑ(昭5卒) 老齡、遠隔で出席できません。御盛會を祈ります。

高梨正三(昭7卒) 近時、地球上の交流深まると共に思想また複雑多岐となり、年重なりてその価値観は変貌しゆくも、己が日本のふるさとの原点を失わざることをおもう。利権欲求の自然哲学は危機を増長しているようである。「人生の並木道」「わが道を行く」面白い企画である。

高橋常吉(昭8卒) 同窓会のご通知ありがとうございました。ちょうど家の引越しさわぎで取り込んでいましたので、出欠の葉書も出さずじまいで失礼しております。運営費をお送りします。

加藤益江(昭10卒) 旅行中で留守いたしておりまして返事おそくなり、大変申し訳ございません。御発展を御祈りいたします。

金子ちよ(昭10卒) ふとしたことから、主人の元会社の友人のお隣りが山形県人と知り、それからいろいろ伺って長井高女の大先輩とわかり、とても嬉しく、身近に感じいつか一度お訪ねしてみたいと思っています。

小関みわ(昭12卒) 昨年久しぶりに2回目の出席をさせて頂きましたが、11・13年卒の方はみんな欠席で淋しい思いでしたが、在職当時の24年卒の方々が声をかけて下さいました。感無量でした。今年は欠席させて頂きませんが、御盛會をお祈り申し上げます。

田辺幸夫(昭13卒) 先約のため残念ながら欠席します。幹事役、御苦勞様。会の盛會を祈り上げます。

宇津木富子(昭14卒) 会報を懐かしく拝見いたしました。年に1度は九野本に帰りますので、“長井線”は幼ない心になったように思い出しました。どの辺か知ることが出来たら一層よかったように感じました。夫は萩生ですので……。

横山きみ子(昭15卒) 15年卒の役員を引き受

けて今日に至りました。5月に主人が亡くなり、まだ多忙のため今回も欠席になりました。御盛會をお祈りしています。

中村和夫(昭16卒) 毎回御案内をいただきながら、いつも欠席で申し訳ありません。母校ならびに同窓会の御発展を祈ります。

大滝和子(昭18卒) 役員・幹事の方々、御苦勞様です。当日の御盛會をお祈り致します。

斎藤 斉(昭19卒) 10月中旬より海外出張の予定ですので、総会は欠席します。

松尾寛治(昭20卒) 体調をこわし緊急入院のため連絡をとれず遅れましたが、事務費を送金いたします。出席できず残念です。次回を楽しみにしています。

小林和子(昭22卒) お世話係の方、いつもありがとうございます。今回もまた、他の同窓会・クラス会と重なってしまい、失礼いたします。

池田徹也(昭23卒) 事務局の方々、お世話様です。今回は会場が家の近くでもあり出席したいと思っておりますが、今のところ予定が重なり、失礼することになります。悪しからず。ますますの発展を願いつつ!

井上 清(昭24卒) ご案内いただきまして誠に有難うございました。あいにく先約と重なりましたので、残念ながら欠席致します。御参加の皆さまによりしくお伝え願います。

佐藤猛郎(昭25卒) 当日は東京を離れておりますので欠席させていただきますが、盛會をお祈りいたします。

千葉早苗(昭26卒) いつもお誘い有難うございます。都合がつかず出席できません。幹事さんの御苦勞に心から感謝致しております。皆様によりしくお伝え下さいませ。

西谷さだ(昭27卒) 同窓会報をなつかしく拝読いたしました。早苗ヶ原での3ヶ年の間に、恩師・友人から受けた教えを大事にして毎日ががんばっています。御盛會をお祈り申しあげます。長瀬にお出かけの折はぜひお立ち寄りください。四季折々に山と川、そして桜と美しい自然に恵まれた長瀬町、小学生の遠足、中学・高校生の地質学の勉強と訪れる人も多い町です。NHKのテレビにもよく放映されます。長瀬七草寺の一つ、桔梗の寺(多宝寺)にあります。こちらにお出かけの際は、ぜひお声をかけてください。

小泉富美子(昭27卒) 事務局のお仕事に携わる皆様方、また同窓会役員の皆様ご苦勞さまなご

とです。総会のご盛会をお祈り申し上げます。

平岡幸子(昭28卒) 一度参加したいと思っていたのですが、今年1月に主人を亡くしました。来年はぜひ参加したいと思います。

安達忠次(昭29卒) 同好会の行事を予定しておりますので欠席致します。御盛会を祈ります。

佐竹きみ(昭29卒) 毎年ほかの会と同日になり欠席のやむなきに至ります。季節も良く行事の多い月ですので仕方ないことですが残念です。同窓会の発展と、会員の皆様の御健康をお祈りします。

芳賀文治(昭30卒) ご案内いただき誠にありがとうございます。小生、お陰様で元気に都教育行政充実・発展のために微力ですが精励いたしております。このたびは、あいにく都合がつかず欠席致します。幹事の方々に厚く感謝致します。

志田光男(昭31卒) なかなか出席することが出来ませんが、会のますます発展されますことを希望しております。

大久保美恵子(昭31卒) 同窓会報、毎年楽しく拝見させていただいております。ありがとうございます。

山水まさ(昭32卒) 会報はとても楽しく読ませていただいております。山口のぶ先生のお変りないお顔の写真と御活躍ぶりに接し、嬉しく存じました。役員の皆様の御尽力に感謝し、ますますの御発展をお祈り致します。

寺迫聰子(昭33卒) 水野先生に受持っていたのは30年位前のことなので、会報で先生の写真を拝見し、本当になつかしかったです。あの頃の先生はもっとスマートでした。

赤堀綾子(昭35卒) 役員の皆様にはいつもお世話いただき深く感謝いたしております。今回の会報には懐かしい方々のお便りがたくさん載っており、とても嬉しく読ませていただきました。

諏訪廣子(昭36卒) 娘が中三、高校受験生で

す。母親として高校見学会に参加し情報を忙しく集めています。自分の高校時代を思い出し、「同窓会に出たい」「友達に逢いたい」と強く思いながら、今回もまた見送らねばなりません。時の流れを待ちます。

岸 信子(昭39卒) 先日、実家の法事で5年ぶりで長井線に乗りました。ちょうど土曜日の昼すぎで、南長井の駅からなつかしい制服を着た後輩たちが乗ってきました。当時と変わらず、思わず高校生の自分にかえてしまいました。

小俣恵子(昭39卒) 事務局の皆様、お世話様です。会報にて懐かしい先生のお便りなどを読ませて頂きました。会の発展をお祈りします。

堀江和子(昭40卒) 幹事の皆様、御苦勞様です。一度出席させていただきたいと思っておりますが、なかなか機会がございません。本年も勤務先の文化祭のため欠席させていただきます。

前司憲行(昭41卒) 会報を拝見して懐かしくまた毎年楽しみにしております。仕事の都合で総会に出席できないのが残念です。鷹桜同窓会の益々の御発展をお祈りいたします。

菅 久(昭44卒) 学校行事の関係で出席できず残念です。事務局の仕事ご苦勞様です。いつか出席できることを楽しみにしています。

市川多佳子(昭45卒) 故郷を離れ19年。ついに県外の方が長くなりました。今春退職、現在子育てに専念し、この夏はじめてゆっくり里帰りしました。同級生にも会えたので、今年の通信はことのほか懐かしく思えます。いつかきっと盛大な総会に加えて頂きたく思っております。

島崎栄一(昭47卒) 初めて同窓会報を拝見しびっくりしています。今回は旅行のため参加できず残念です。

(以上、昨年の総会時に寄せられたお便りのいくつかを紹介いたしました。)

団体旅行・観光バス・

ホテル・旅館の御用命

は当社へお任せ下さい。



山形交通

●東京観光営業所
〒110 東京都台東区東上野三丁目39-10(光和ビル1階)
☎03(831)3031(代) FAX03(835)1015

新人歓迎会開かる

去る6月24日、私学会館(市ヶ谷)において新人歓迎会が開催された。その時の参加者を紹介しますが、遅れて参加された方もあり、リストおよび写真とも全員ではありません。



- | | | | |
|-------------|---------------|-------------|--------------------|
| 青木陽子 (南陽市) | 昭和音楽大学短期大学部 | 島貫千秋 (川西町) | 東京都立商科短期大学 |
| 飯沢陽子 (長井市) | 国立横須賀病院附属看護学校 | 島貫真由美 (") | サンシャインビジネス社会福祉専門学校 |
| 伊藤正広 (") | 国立音楽学院 | 城 隆史 (長井市) | 職業訓練大学校 |
| 梅津 岳 (") | 神奈川大学 | 鈴木淳也 (") | 東京デザイナー学院 |
| 遠藤克彦 (南陽市) | 東放学園専門学校 | 鈴木智子 (南陽市) | 国立病院医療センター附属看護学校 |
| 大河原泉 (川西町) | 埼玉県立衛生短期大学 | 多勢ちあき (") | 相模女子大学短期大学部 |
| 大木広司 (長井市) | 東京外語専門学校 | 土屋康樹 (長井市) | 代々木ゼミナール |
| 太田寛彦 (白鷹町) | 中央医療技術専門学校 | 中村久美 (飯豊町) | 相模女子大学短期大学部 |
| 岡崎男也 (") | 東京商科学院専門学校 | 松本浩明 (米沢市) | 外務省勤務 |
| 金子 努 (川西町) | 東京都勤務 | 御供佳奈 (川西町) | 予備校 |
| 川村美奈子 (長井市) | 東京医学技術専門学校 | 山口 司 (南陽市) | 山野美容専門学校 |
| 北 信彦 (白鷹町) | 東京商科学院専門学校 | 横山明希 (長井市) | 東京パシフィックビジネス・カレッジ |
| 小杉綾子 (長井市) | 文化女子大学 | 吉田和子 (") | 帝京女子短期大学 |
| 斎藤喜栄子 (") | 中央大学 | 吉田茂樹 (南陽市) | 明治大学 |
| 佐竹ひろ美 (白鷹町) | 常磐大学 | 吉田千佳 (長井市) | 神奈川県立栄養短期大学 |
| 佐藤一義 (川西町) | 研数学館 | | |
| 佐藤美月 (南陽市) | 青山学院女子短期大学 | | |

東京鷹桜同窓会役員・学年幹事

(数字は卒業年)

顧問	長沼孝三(大14)				
相談役	渋谷幸太郎(昭2)	川野カツ(昭2)	庶務	荒生保男(昭37)	石井宏子(昭37)
	桑島喜平(昭4)	渋谷利蔵(昭4)	会計	末吉暁子(昭36)	大友茂之(昭49)
会長	高橋正二(昭7)		監査	當麻 葵(昭28)	中山和弘(昭45)
副会長	吉田志津(昭9)	安部欣一(昭15)	常任幹事	椎名 茂(昭26)	菅 七郎(昭27)
	高橋忠三(昭26)	綿谷琴子(昭28)		木村 繁(昭28)	
事務局長	七屋東一(昭35)		編集委員	武田律子(昭34)	丸川 満(昭39)

〔学年幹事〕

大14	飯沢菊雄	32	色摩 正, 難波俊子, 安部綾子, 嶺岸美年子
15	児玉 茂, 成島マサ	33	鈴木清雄, 鈴木ミヨ, 白井暢子
昭2	斎藤栄一, 川野カツ	34	安部紀男, 柴田静子, 武田律子
3	芳武茂介, 梅津 露	35	寒河江忠, 坂本キミ子, 石見昌子
4	渋谷利蔵, 倉島 米	36	安部 浩, 末吉暁子, 松田勝代, 海老名信子
5	寺嶋景作, 石島フサ	37	荒生保男, 石井宏子, 沢田美根子, 田所せつ
6		38	村上隆則, 三上淑子, 市川春子
7	高橋正二, 桑島従子, 武田 信	39	平吹 登, 丸川 満, 根岸礼子
8		40	田中信孝, 樋口 彬
9	廣田孝二, 吉田志津	41	
10	新野辰雄, 加藤益江	42	
11	川村計蔵, 長岐靖朗, 角田イチ	43	
12	斎藤嘉代次, 深瀬和夫, 児玉ひろ	44	浅野陽一, 菅 久, 沼沢幸雄, 権田みち子
13	今野信一郎, 平田まつ子	45	中山和弘, 荘司信明, 藤原啓子
14	安部 孝, 屋島 幸	46	安部俊彦
15	安部欣一, 横山きみ子, 大岡ヒロ	47	
16	熊野 実, 鈴木貞男, 遠藤トキ子, 新田元	48	
17	田中うん, 鈴木リツ	49	大友茂之
18	菅野力蔵, 竹田いそ子	50	金田弘起, 船山義彦
19	井上忠吾, 三須秀亮, 長谷部淳子, 奈須テル	51	
20	高石昭二郎, 布施篤美, 尾山きく子, 中島コウ	52	西堀 理, 阿曾亮子
21	大竹修一, 諏訪しげ子	53	
22	横沢良助, 加藤 方, 岩井節子	54	
23	美坂修典, 樋口とく	55	
24	松岡敬一郎, 折居洋子	56	牛沢典子
25	青木 宏, 浅田きよ	57	
26	椎名 茂, 高橋忠三, 貴志悦子	58	
27	菅 七郎, 中川 孝, 加藤房子	59	
28	木村 繁, 綿谷琴子, 當麻 葵, 衣袋美砂子	60	
29	高石賢一, 土屋哲男, 仲谷智子	61	
30	那須芳麿	62	
31	丸川 毅, 岩井恭子, 大谷礼子, 菅野清子	63	渡部祥郎, 今 五月, 須貝幸子, 鈴木礼子
			平元

◇ 事務局からお知らせ ◇

(1) 行事・活動の記録

63年9月15日 東京鷹桜同窓会の昭和63年度総会開催のために、最後の準備を綿谷邸において行なう。世話役(昭29年・34年卒業)の皆さんの協力によって、約3100通の案内状・会報等を発送完了。より多くの参加者を待つのみとなる。

63年10月30日 東京鷹桜同窓会定例総会が、池袋の東方会館において、布施篤美氏(昭20卒)の司会で開かれた。参加者は前年よりもやや少ない135名であったが、母校の今田校長、同窓会本部の村山会長等の御出席と御祝辞もいただき、盛大かつ賑やかに行なわれた。また、新役員になられた綿谷琴子副会長、中山和弘監査、丸川満編集委員が紹介された。恒例の学年紹介のほか、協力学年の中島コウさんの名指揮で懐かしい歌の数々の大コーラスがあり、中村美寿さん(昭37卒)の美声の民謡も加わり、楽しい時間はあっという間に過ぎ去って、最後に新人の渡部祥郎君のメール交換でめでたく閉会となった。

63年12月3日 新宿の東京大飯店において、役員・事務局会議が開かれ、慰労会を兼ねた反省会が行なわれた。

平成元年2月4日 高橋会長が本部の同窓会に出席された。

元年2月10日 役員会を有楽町の「さがみ」で行ない、新人歓迎会等について協議をした。

元年6月5日 新人歓迎会を前にして、住所不明者を渡部朋広君、岡崎男也君の協力を得て再調査し、案内の連絡を完了した。

元年6月14日 6月24日開催予定の学年幹事会および新人歓迎会について、事務局の最終的な打ち合わせを行なった。

元年6月24日 学年幹事会および新人歓迎会が市ヶ谷の私学会館で開催された。新人の参加人数は、当初の予想をはるかに上まわり、約40名という盛況であった。高橋会長、安部副会長から歓迎の言葉があり、その後、川野カツ相談役の音頭で乾杯された。また、母校からかけつけられた横山哲夫先生に、御挨拶と新人諸君の紹介をして

いただいた。新人諸君には、名前、出身地、進学校・勤務先を書いてもらったが、詳しくは14ページの「新人歓迎会開かる」をご覧ください。

なお、新人歓迎会に先立って開かれた学年幹事会では、活動予算の不足が問題となり個々バラバラな意見が飛び交った。具体的な対応策も出ぬまま中川 孝氏(昭27卒)が広告担当を申し出、問題解決の一助に努力していただくことになった。

(石井宏子)

(2) 昭和63年度会計報告

(平成元年3月31日現在)

<収入>		<支出>	
前年度繰越金	1,243,590	総会費	731,732
総会会費	881,000	歓迎会費	270,118
歓迎会会費	114,000	会議費	192,963
祝金	87,000	事務費	26,528
事務費(596円)	596,000	交通・通信費	278,260
補助金(本部より)	10,000	印刷費	211,075
		(会報を含む)	
受取り利息	43,418	祝金	10,000
計	Ⓐ 2,975,008円	計	Ⓑ 1,726,276円
		A - B =	1,248,732円(次年度繰越金)

(末古暁子)

編集後記 同窓会報第8号をお届けします。今回は役員名簿や特集記事などで2倍のページ数となってしまいました。御執筆に協力していただいた皆様のお陰で、前号同様に実に充実した会報になりましたことを心から御礼申しあげます。

さて、私は同窓会報にも哲学があって然るべきと考えています。土屋事務局長の“ボランティアですよ”という余りに美しい言葉に誘われて、どれほど立派なものをつくれるかはわからないが、非力ながら努力してみようというハメになったのですが、6月の学年幹事会での発言などを考えると、卒直に言って会報もこの方針で続けられるのだろうかと思います。社会的に立派な活躍をされている方々が多いはずなのに、ボランティアの事務局や若年層に無理解な発言の多さには驚きでした。学年幹事のリストでも、不在の場合は空白にしてありますが、その空白の意味を読み取って欲しいと思います。これだけの大規模な同窓会組織でありながら、どうしてもっと円滑に運営されないのだろうか…。

(丸川 満)